

古層カンナダ語の複合語記述の枠組みについて

家 本 太 郎

I. 序

本稿の目的は、古層カンナダ語¹⁾の複合語記述に対し、新しい枠組みを提出することである。従来、ドラヴィダ語研究においては、名詞複合語、動詞複合語、形容詞複合語は、互いに独立した範疇として記述されてきた。本稿では、それらを、連続体を成し、互いに有機的に関連する範疇として記述する方法をとる。

II. 従来の研究およびドラヴィダ語伝統文法家による記述

1 広義の動詞複合語(即ち verbal participle による一般的な動詞連続、及び verbal participle 或いは infinitive に助動詞が付加された形式)の相、時制、法、態のシステムや語用論的機能については、Annamalai(1982)、Rajapurohit(1975)、Subbarao(1979)を始め、少なからぬ研究がなされているが、本稿の対象となる語幹複合語については、これらとの関連で僅かに言及されるのみである。

タミル語、マラヤーラム語、テルグ語の名詞複合語に関するまとまった研究としては、各々、Vijayavenugopal(1975)、Ravindran(1975)及び Suryanarayana(1966)が挙げられる。

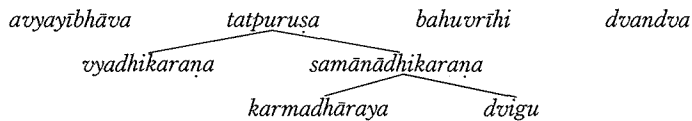
Vijayavenugopal 論文は、Chomsky の標準理論の枠組みで、構成要素間にみられる格関係を観察したものである。Ravindran も同様の枠組みに依っている。Suryanarayana はサンスクリット複合語の枠組みで、テルグ文学史上、多量のテルグ語固有語集を用いたことで有名な Tikkana の Mahābhārata 訳における用例を分類している。

カンナダ語の複合語についての若干の考察が Ananthanarayana(1984)である。彼はカンナダ語複合語形成に対するサンスクリットの影響を論じ、*dvandva* 及び *avyayibhāva* はインド内で特殊に発達した形成法であり、*karmadhāraya* と *dvigu* を含む *tatpuruṣa* 及び

dvandva はドラヴィダ語が本来、有していた形成法であると結論付ける。しかし、複合語構成要素間においてどちらが意味のセンターになるかといった基準により、2つの言語間の影響関係を論ずることは意味をもたない。

これらの文献はいずれも名詞複合語を中心に記述を行なっているが、ドラヴィダ語に特徴的な現象であると考えられる、動詞複合語との有機的関連については全く言及していない。

2 サンスクリット複合語は、構成要素間において、前項・後項のいずれが意味のセンターになるかにより、*avyayibhāva* (前項がセンター)、*tatpuruṣa* (後項がセンター)、*bahuvrīhi* (いずれもセンターでない) 及び *dvandva* (いずれもがセンター) の4種に大別され、*tatpuruṣa* は、構成要素間に格関係が存在する *vyadhikaraṇa* と格関係が存在しない *samānādhikaraṇa* に二分され、後者は更に、前項が限定形容詞として機能する *karmadhāraya* と前項が数詞である *dvigu* に区分される。



3 古代タミル語文典 *Tolkāppiyam* (B.C.2c-A.D.5c) によれば、古代タミル語の複合語は以下の6種に分類される。構成要素間に格関係が存在する *vērrumai-t-tokai*、前項が動詞、後項が名詞である *vinai-t-tokai*、前項が後項名詞の属性を限定する *paṇṇu-t-tokai*、後項の属性が前項に比される *uvama-t-tokai*、*bahuvrīhi* に相当する *anmoli-t-tokai*、*dvandva* に相当する *ummai-t-tokai* である。

(3-a) *vērrumai-t-tokai*

mara-veṭṭu “wood-cutting”, *kaya-malar* “flower in a tank”, *malai-y-aruvi* “mountain torrent”

(3-b) *vinai-t-tokai*

ari-vaḷ “the sword that cuts”, *kol-yāṇai* “the elephant that killed, kills, will kill”, *cey-kunra* “artificial mound”

(3-c) *paṇṇu-t-tokai*

karuṇi-kutirai “black horse”, *tīṇ-karumṇu* “sweet sugarcane”, *vatta-p-palakai* “round plank”

(3-d) *uvama-t-tokai*

murañ-cevi “winnow-like ear”, *tuti-y-itai* “tuti-like waist”

(3-e) *anmolī-t-tokai*

vell-āṭṭi “the man who wears a white saree”, *porr-ōṭi* “one who has golden bangle”

(3-f) *ummai-t-tokai*

āṭal-pāṭal “dancing and singing”, *kapila-paraṇar* “Kapila and Parānar”,
cēra-cōḷa-pāṇṭiyar “Cera, Chola and Pandya”

uvama-t-tokai の前項は対格を付与された名詞としてパラフレーズできるので、*vērrumai-t-tokai* の下位クラスと規定できる。動詞複合語に言及しているのはドラヴィダ語伝統文法の中で *Tolkappiyam* のみであるが、古代タミル語において、関係詞形成接辞や格表示接辞が頻繁に省略されるという現象、上記の *kol-yānai* などの例や形容詞形成接辞 *-a* を伴った *vatta-p-palakai* の様な例を考慮すれば、複合語と相応する句との区別は明確ではないといえる²⁾。

4 Rajarajavarma の *Kēraḷa Paṇinīyam* (ca.1850) では、マラーヤラム語の複合語としては、次の3種のみが挙げられている。

(4-a) *tatpuruṣa*

poṇ-kuṭam “golden pot”, *perra-amma* “mother who gave birth”, *kai-veṭiyuka* “to forsake”, *koṇṭa-āṭuka* “to celebrate”

(4-b) *bahuvrīhi*

nān-mukham “one who has four faces”, *mu-k-kaṇṇam* “one who has three eyes”,
kañja-nērmili “one who has the eye like the petals of lotus”

(4-c) *dvandva*

acchan-ammanār “father and mother”, *kai-kālukaḷ* “hand and leg”, *pattu-patinaṅca* “ten or fifteen”

(4-a)に関し、彼の分類の特異な点は、形容詞プラス名詞、関係詞句、名詞プラス動詞、副詞プラス動詞のタイプが *tatpuruṣa* として分類されていることである。

5 Nannaya に帰される *Āndhra Śabdacintāmani*, Atharvan に帰される *Vikṛtiviveka* 等のテルグ伝統文法(いずれも西紀14世紀)において挙げられている古テルグ語の複合語は以下の10種である。前項名詞の格語尾が保持されている *aluk-samāsa*, 第2次派生語尾が

保持されている *matuṣ-samāsa*, サンスクリット同様の *avyayibhāva*, *bahuvrīhi*, *dvandva*, *karmadhāraya*, *tatpuruṣa*, 後項の属性を直喩的に前項が指向する *rūpaka-samāsa*, 後項の属性を暗喩的に前項が指向する *upamāna-samāsa* である。

(5-a) *aluk-samāsa*

nāvala-ni-nēramu “mistake from me”, *nīyanda-li-karuna* “kindness in you”,
nātō-ḍi-celimi “friendship with me”

(5-b) *matuṣ-samāsa*

pu-vvu-nīllu “water having flower in it”, *tāv-i-molla* “smelling jasmine”

(5-c) *avyayibhāva*

peḍa-tala “back side of head”, *nāḍu-rēyi* “midnight”

(5-d) *bahuvrīhi*

cali-velugu “he who has cold light, the moon”, *māḍu-kannulavāḍu* “he who has three eyes, Shiva”

(5-e) *dvigu*

tri-loki “group of the three worlds”, *iru-mēnu* “two bodies”

(5-f) *tatpuruṣa*

uli-tunuka “a piece chapped by chisel”, *paḍi-verapu* “fear from justice”, *malle-pūvu*
“flower of jasmine”

(5-g) *dvandva*

mañci-ceḍu “good and bad”, *kuḍ-kūra* “boiled rice and curry”

(5-h) *karmadhāraya*

vāl-ammulu “sharp arrows”, *ciguru-ṭ-āku* “tender shoot”, *tella-tammi* “white lotus”

(5-i) *rūpaka-samāsa*

mōvi-paṇḍu “fruit that is a lip”, *puṣpa-bāṇamu* “arrow that is flower”

(5-j) *upamāna-samāsa*

kēlu-dammi “lotus like hand”, *mōmu-dāmara* “lotus like face”

テルグ語においても, *aluk-samāsa* や *matuṣ-samāsa* にみるように, 複合語と句との混同が看取される。

6 古層カンナダ語の代表的な土着文典は Kēśirāja による *Śabdamaṇidarpaṇa* (ca.A.D.1280) であり, 複合語は以下の 7 種に分類される。サンスクリット同様の

tatpuruṣa, *avyayibhāva*, *bahuvrīhi*, *dvandva* に加え、前項が名詞、後項が動詞である *kriyā-samāsa*, 前項が代名詞、数詞、形容詞で、後項が名詞である *gamaka-samāsa*, 構成要素が、カンナダ語とサンスクリットからなる *ari-samāsa* である。

(6-a) *tatpuruṣa*

tēru-bīdi “temple-car street”, *raṇa-dhīra* “hero in the battle field”

(6-b) *avyayibhāva*

pin-til “back of the house”, *aṇi-gai* “palm of the hand”

(6-c) *bahuvrīhi*

pīta-ambara “yellow garment, ascetic”, *cakra-pāṇi* “discus hand, Vishnu”

(6-d) *dvandva*

āne-kuduregal “elephant and horse”, *paṇṇu-kāyi* “ripe fruit and unripe fruit”

(6-e) *kriyā samāsa*

dhairya-goḷ “to take courage”, *mana-kāṇ* “to see with the mind”, *kelasa-maḍu* “to do works”

(6-f) *gamaka samāsa*

āva-nāyakam “which leader?”, *irpatt-aidu* “twenty-five”, *pāḍu-va-tumbi* “a singing bee”, *ā-mane* “that house”, *bīli-ya-karbu* “white sugarcane”

(6-g) *ari-samāsa*

ari-nāyaka “intelligent leader”, *ir-bala* “two forces”, *ellā-dhana* “all wealth”

この分類の特徴は、*gamaka-samāsa* の設定である。Kulli (1976: 165-68) は、サンスクリット複合語の枠組みで記述できないものが *gamaka-samāsa* として分類されたもので、*karmadhāraya* とは用語の差異のみであると述べている。確かに、前項の接辞は形成時に削除されるという規則 (sū.173) からは、*gamaka-samāsa* は逸脱しているが、Kēśirāja は、名詞・動詞・形容詞の間にみられる平行性、及び複合語と相応する句構造との平行性に関わる現象を意識していたように思われる。動詞・形容詞の語幹が前項として機能する複合語³⁾ は *karmadhāraya* に分類され、相応する句構造が *gamaka-samāsa* と見なされているからである。*karmadhāraya* 及び *gamaka-samāsa* に各々、用いられる形式を挙げれば、先ず、形容詞では⁴⁾、*in ~ iniya* “seet”, *kar ~ kariya* “black”, *per ~ piriya* “big”, *beḷ ~ bīliya* “white”, 動詞では、*āḍ-um-bola ~ āḍu-va-bola* “a play field”, *tūg-um-dottīl ~ tūgu-va-dottīl* “a swinging cradle” となる。

Ⅲ. 複合語認定基準

1 複合語認定に関与する事象は、結合時に起こるサンディ、前項における接辞の扱い、いわゆる語幹複合の現象、給合部位に現れる morphological ‘glue’⁵⁾ の4つである。

(i) 観察されるサンディは次の4種である。

(a) 前項語末母音 *-u* の消失

atṭu-āḍavi → *atṭ-āḍavi* “an impervious forest”, *usuru-āḍisu* → *usur-āḍisu* “to breathe”,
pasuru-uḍige → *pasur-uḍige* “a green cloth”

(b) 後項語頭子音の軟音化

aḍaru-kālu → *aḍaru-gālu* “a raised foot in walking”, *ānu-kōlu* → *ānu-gōlu* “a staff to lean upon”, *alar-tōraṇa* → *alar-dōraṇa* “a festoon of flowers”, *onagu-tōr* → *onagu-dōr* “to become dry”, *oppu-bajjara* → *oppu-vajjara* “a polished diamond”, *kulir-berasu* → *kulir-verasu* “to be cool”, *ḍonku-per* → *ḍonku-ver* “to get crooked”, *tagar-penagisu* → *tagar-venagisu* “to cause rams to fight”, *tage-mugil* → *tage-vugil* “an obstructing cloud”, *pasur-mani* → *pasur-vani* “an emerald”, *taṇ-pulil* → *taṇ-bulil* “cool sand”, *taru-pullu* → *taru-bullu* “joined grass”, *taṇ-soḍar* → *taṇ-joḍar* “an extinguished lamp”

(c) *-y* の挿入

kaḍi-akki → *kaḍi-yakki* “rice broken from brittleness”, *tīli-eṇṇe* → *tīli-y-eṇṇe* “clear oil”, *paṛi-idu* → *paṛi-y-idu* “to run”

(d) 前項末尾子音及び後項頭音における変化

in-sara → *iṅ-cara* “sweet sound”, *payin-sāsira* → *payiṅ-chāsira* “ten thousand”

(ii) 古テルグ語では、若干の複合語で、前項の接辞が保持されるが、古層カンナダ語の場合、削除される。Kēśirāja による *gamaka samāsa* の設定は、この条件に反するが、後で言及する、名詞複合語、動詞複合語、形容詞複合語と各々、相応する句との平行性との関連では示唆的である。

(iii) 古層カンナダ語においても、他のドラヴィダ語同様、いわゆる語幹複合がみられる。一連の単音節形容詞がこれに相当し、後項の頭音に条件付けられ、異形態を持つ。この現象は、他のドラヴィダ語でも一般的で、ドラヴィダ語の形容詞の問題を考察する際にも重要である。

(a) {*ol̥* ~ *oll̥*} *ol̥-nuḍi* “good word” ~ *oll̥-āne* “fine elephant”

(b) {*taṇ* ~ *taṇṇ*} *taṇ-bulil* “cool grove” ~ *taṇṇ-elar* “cool breeze”

- (c) {*nal*~*nall*} *nal-varake* “good blessing”~*nall-ambu* “good arrow”
 (d) {*kaḍu*~*katt*} *kaḍu-viṅpu* “great heaviness”~*katt-idir* “just front”
 (e) {*niḍu*~*nitt*} *niḍu-gaṇ* “an elongated eye”~*nitt-elvu* “long bone”
 (f) {*kar*~*kār*} *kar-basu* “black cow”~*kār-irul* “dark night”
 (g) {*per*~*pēr*} *per-dere* “big wave”~*pēr-āne* “big elephant”
 (h) {*in*~*inn*~*im*} *iṅ-cara* “sweet sound”~*inn-unisu* “sweet meal”~*im-māvu*
 “sweet mango”
 (i) {*kem*~*ceṃ*~*kēs*~*kisu*} *kem-dalir* “red shoots”~*kem-gari* “red feather”~*ceṃ-
 bon* “red gold”~*kēs-uri* “red fire”~*kisu-von* “red gold”

以上のうちで、(i)は補助的な認定基準である。後項頭音の軟音化は随意的であり、*-y*の挿入は複合語形成のみならず、接辞付加の場合にもみられるからである。決定的な基準は、前項が語幹形式となることである。ドラヴィダ語の名詞句、動詞句、形容詞句の形態素連鎖は、概略、以下の通りである。

noun : root+derivative suffix+empty morpheme+suffix

verb : root+derivative suffix+tense suffix+personal suffix

adjective : root+derivative or adjective suffix

(iv) 古層カンナダ語の場合、いくつかの複合語の結合部位に*-uṃ*なる形式が現れる。Kēśirājaによれば、これは音調上の一種の加音とされ、次のように分節される。(Śabdamaṇidarpaṇa 158)

ettu-m-gōl, urku-m-dore, ottu-m-ball, ēru-m-jovvanam

しかし、語幹末の*-u*は、タミル語伝統文法家によって *kurriyalukaram* (‘the shorter *-u*’ or ‘elidable *-u*’)と規定されている母音と同種のものであり、半モーラ (*arai mattira*)の音価をもち、母音が後続した場合、しばし消失し、*-u*を保持する為に*-m*を付加する必要はない。更に、次の例のように*-y*を伴った形式がみられることから、

sidi-tale→*sidi-y-uṃ-dale* “a head that is flying about”

ili-poltu→*ili-y-uṃ-poltu* “the setting sun”

ett-uṃ-gōl, urk-uṃ-dore, ott-uṃ-ball, ēr-uṃ-jovvanam

と分節されるべきである。

また、この*-uṃ*が現れる複合語の構成要素間の統語的環境を示すことが可能である。それらはV(pres.)-Nに分類される複合語である。

irk-uṃ-gāl “a destructive enemy”, *kutt-uṃ-guli* “a person engaged in beating”,

tūg-um-dottil “a swinging cradle”, *pār-um-bani* “flying drops”, *sutt-um-gaḍalu* “the ocean which surrounds”

この種の *-um* は、通時的には、古代タミル語の非過去の関係詞形成接辞との関連が窺われるが、共時的には V(pres.)-N 複合語の morphological 'glue' であるといえる。

IV. 複合語形成パターン

1 前項となるのは、動詞、名詞、形容詞、副詞であり、後項となるのはこれらの品詞に加え、否定辞の *-il* である。尚、これらの文法範疇は筆者自身による記述の枠組みに従っており、これまでに編まれた辞書におけるものとは異なっている場合がある⁹⁾。

構成要素間の統語的關係を基準にすれば、古層カンナダ語の複合語は以下のようなグループに分類できる。

- (i) N-N group : N (gen.) -N, N (ins.) -N, N (acc.) -N, N (dat.) -N, N (abl.) -N, N (loc.) -N, N (soc.) -N, N-N (gen.), N-N (ins.), N-N (dat.), N-N (loc.), N-N (Co.), N (echo) -N⁷⁾, N-N (reit.)
- (ii) N-V group : N (nom.) -V, N (acc.) -V, N (dat.) -V, N (ins.) -V, N (abl.) -V, N (loc.) -V, N (soc.) -V
- (iii) N-A : N (loc.) -A
- (iv) A-N
- (v) A-A
- (vi) V-N group : V (pf.) -N, V (pres.) -N, V (passiv.) -N, V (inf.) -N, V (stativ.) -N, V (able) -N⁸⁾, V-N (loc.)
- (vii) V-V group : V (v.p.) -V⁹⁾, V (inf.) -V¹⁰⁾
- (viii) Adv-V group : Adv (←N) -V, Adv (←V) -V
- (ix) N-Adv
- (x) N-N-N, V-N-N, A-N-N, N-neg, N-neg-N
- (xi) 統語的關係を一義的に決定できないグループ

以下に各々のグループに分類される実際の形式をみることにする。

(i-a) N(gen.)-N

alar-gambu “the scent of fragrance of flowers”, *ugi-kāvu* “the heat of steam”, *kaḍi-meṭṭi* “the impression of a horse’s hoof”, *nudī-ven* “the Goddess of speech, Saraswati”,

bage-vane “the abode of thought, the mind”

(i -b)N(ins.)-N

key-duḍuku “the act of seizing eagerly”, *nuḍi-meccu* “assent by word”, *pasur-gūlu* “rice mixed with green colouring substances” *pō-marana* “death through with depart”, *muttu-rōga* “a child’s disease coming from the touch of a menstruous woman who is not the mother”

(i -c)N(acc.)-N

pari-vidi “cause-seizing, order”, *kaṅ-gāpan* “eye protection”, *pore-vorakan* “person or object bearing a burden”

(i -d)N(dat.)-N

aṅi-kōlu “the stick which keeps the loops of the woof apart”, *tappu-kaṅike* “a gift to make amends for an impropriety”, *muttu-mane* “a room appropriated to a woman in menstruation or child birth”, *muḍi-vaṅi* “a gem for the hair *muḍi*”

(i -e)N(abl.)-N

āli-nīr “water for dew”, *bān-dor* “the river from the sky”

(i -f)N(loc.)-N

alar-vakki “the flower-bird, the large-hum”, *kisur-alīpan* “one who is addicted to quarrels”, *key-nīr* “water poured over hand of the bridegroom and bride”, *tale-vēsaṅan* “the weariness of the head”, *nīr-ātam* “sporting in water”

(i -g)N(soc.)-N

pū-mara “a tree bearing blossoms”, *pū-ravaka* “a bodice with flowers”, *mole-diguru* “a wheel with a sharp edge”, *sulī-dale* “a head with curled hair”

(i -h)N-N(gen.)

gīru-gandha “streaks of sandal on the body”

(i -i)N-N(ins.)

aṅṅu-muttu “impurity contracted through a death”, *sadi-bēne* “a disease by which the the limbs grow bent”

(i -j)N-N(dat.)

talīr-ambu “a young shoot used as an arrow”

(i -k)N-N(loc.)

aral-podeya “one who has a flower on his belly, Vishnu”, *kaval-otu* “the stem of a tree

up to the branches”

(i -l)N-N(co.)

ubbu-taggu “hill and dale, unevenness”, *koṅku-koṅate* “wrong and defects”, *taguḷu-mugulu* “approaching and receding”, *taggu-muggu* “ups and downs”, *nade-nuḍi* “conduct and speech”, *sōlu-sante* “loss and gain”

(i -m)N-N(echo)

adaru-bedaru “shaking and quaking”, *idu-toḍu* “ornaments and clothes”, *kari-muri* “a charred and bent state”, *doṅku-paṅku* “a bend”

(i -n)N-N(reit.)

alar-alar “flowers”, *oras-orasu* “great and mutual friction”, *kaḍi-kaḍi* “cuts and fragments”, *tuttu-tuttu* “a mouthful of food” *pari-pari* “various ways or manners”

(ii -a)N(Nom.)-V

urbu-gundu “pleasure to decrease”, *usuru-kattu* “breath to be obstructed”, *tappu-bilu* “a mistake to occur”, *nare-dōru* “grey hair to appear”, *paṅṅu-dōru* “ripe fruit to appear”

(ii -b)N(acc.)-V

ani-kattu “to join a certain number of threads”, *alar-vidi* “to seize flowers”, *taki-y-ere* “to throw delicious food to snakes to appease them”, *nuḍi-gē!* “to hear a word”, *pode-gattu* “to prepare a quiver”

(ii -c)N(dat.)-V

uri-vogu “to enter flames”, *dūru-vōgu* “to get blamed”, *pū-vugu* “to get into a flower”, *bage-vugu* “to enter the mind”, *mare-vugu* “to go for portection”

(ii -d)N(ins.)-V

ugi-kāsu “to heat by steam”, *key-dolasu* “to beat by the hands”

(ii -e)N(abl.)-V

alar-ica “the flower-born, Brahma”

(ii -f)N(loc.)-V

mare-ver “to take as one’s shelter”, *mudi-kattu* “to tie up in a bundle of straw”, *nade-gidu* “to become unable to walk”, *oḍḍu-mere* “to be displayed in masses”

(ii -g)N(soc.)-V

talir-vēr “to be laden with young leaves”, *nali-vari* “to run with pleasure”

(iii)N(loc.)-A

nudi-jāṇa “talkative”

(iv)A-N

oḷ-gannada “good Kannada”, *taṇ-bani* “a cool drop”, *pusi-nudi* “a lie”, *baḷ-gamba* “strong post”, *teḷ-vasir* “slender stomach”, *ben-nīr* “hot water”, *paṇ-dalir* “fresh shoots”, *aṭṭ-aṭṭi* “intimate love”, *ali-mana* “a mean mind”, *ubbu-gobbu* “excessive pride”, *kall-accu* “a false mould”, *cali-nāḍu* “a cool country”, *taggu-bhūmi* “low ground”, *tani-gammu* “a rich fragrance”, *tīli-rasa* “a pure liquid”, *maruḷ-dumbi* “a mad black bee”, *mundu-gaḍe* “the front side”, *sari-bari* “equal manner”, *savi-nudi* “a sweet word”

(v)A-A

tutta-tudi “the very end or top”, *motta-modal* “the very first”, *sari-sama* “equal”

(vi-a)V(pf.)-N

udaru-gālu “grains of corn in field that have fallen from the ears”, *ūdu-baṭṭi* “a morbidly swollen body”, *tani-veṇa* “a full ripe fruit”, *tumbu-vere* “the full moon”, *habbu-giḍi* “sparks that spread”

(vi-b)V(pres.)-N

alar-valli “a flowering creeper”, *āḍ-um-dole* “a swinging beam”, *uri-giccu* “a flaming fire”, *ott-āne* “a tame elephant used to catch wild ones”, *osar-nīr* “oozing water”, *tage-vuḡil* “an obstructing cloud”, *nade-veṇa* “a walking corpse”, *nege-vāvu* “a snake that jumps”, *siḍi-dale* “a head that moves quickly from side to side on account of pride”

(vi-c)V(passiv.)-N

aḍu-gūḷ “boiled rice”, *oppu-vajjara* “a polished diamond”, *tali-sāri* “dice or chess-men that are thrown about”, *poṇ-nīr* “water that is poured”, *baḍi-hōri* “a gelded young bull”, *mase-gaṇe* “a whetted arrow”, *muṇi-dale* “a head that is cut off”

(vi-d)V(Inf.)-N

iḍu-gal “a stone used for throwing”, *ore-gal* “a touch stone”, *kuḍi-vāl* “milk for

throwing”, *nade-maḍi* “a clean cloth that is spread out for walking upon”, *percu-nīr* “water poured over a young child for its growth”, *badi-kōl* “a staff for striking”, *toḍu-ku-vale* “a kind of net”

(Vi-e)V(stativ.)-N

koṅku-ugur “a bent nail”, *ubbu-galla* “a cheek puffed off”, *biḍu-gaṇ* “an open eye”, *muduḍu-givi* “an ear the outside of which is shrunk”, *suli-gurul* “curled hair”

(Vi-f)V(able)-N

uri-vane “an easily inflammable house”, *ettu-gallu* “a stone that is liftable with common strength”, *kattu-gaḍasu* “a cow fit to receive the bull”, *bedar-ettu* “a bullock that is easily frightened”

(Vi-g)V-N(loc.)

tuli-geṇḍa “walking on fire”

(VII-a)V(v.p.)-V

uruku-gol “to be paralysed”, *embu-key* “to assent”, *todak-āgu* “to become entangled”, *nirugu-tege* “to stretch”, *pō-tar* “to go and bring”, *bage-vaccu* “to begin to cheer up”, *muri-gede* “to be routed and fall”, *suttu-var* “to come or go round about”, *suli-var* “to wander”, *pāsu-gey* “to spread”

(VII-b)V(inf.)-V

ode-sil “to split a thing that it is reduced to fragments”, *tade-gaḍi* “to cut so as to impede”, *pō-muṅgu* “to swallow so that a thing goes”, *savi-dōru* “to appear so as to be sweet”

(VIII-a)Adv(←N)-V

eraḷ-nuḍi “to speak differently”, *oda-vuttider* “brothers”, *kil-māḍu* “to degrade”, *tadam-āḍu* “to move excessively”, *pera-geḍu* “to fall backwards”, *beṅ-gol* “to follow”, *mēl-eḷ* “to rise against”

(VIII-b)Adv(←V)-V

opp-ase “to appear to great advantage”, *tani-gedaru* “to be greatly scattered”, *nere-gaccu* “to bite excessively”, *kaḷi-vari* “to run to a great distance”, *koṅku-māḍu* “to act in a perverse manner”, *bage-nō* “to get mentally afflicted”, *sari-goḷisu* “to put in a proper

state”, *peccu-tili* “to know more”

(ix)N-Adv

opp-ante “in a suitable manner”, *belag-annaka* “till down”, *belag-āta* “at dawn”

(X-a)N-N-N

cali-vett-aliya “Himalaya’s son-in-law, Shiva”

(X-b)V-N-N

kulir-vāli-nīr “very cold water”, *cali-gadir-gal* “the moon gem”

(X-c)A-N-N

tan-nīr-dali “to sprinkle cold water”, *mogam-bugu-tar* “to face”

(X-d)N-neg.

bard-ila “a man who is free from death, a deity”, *belag-ili* “devoid of light”

(X-e)N-neg.-N

bard-il-ālma “Indra”, *belag-ili-gaṇ* “a blind eye”

(Xi-a)A-N~V(pres.)-N

att-um-jagal “a close fight”, *sork-āne* “an elephant in rut”

(Xi-b)V(inf.)-N~V(pres.)-N

adu-bānale “a frying pan”, *kaḍe-gōl* “a churning stick”

(Xi-c)V(v.p.)-V~N(acc.)-V

appu-key “to assume”, *uri-goḷ* “to catch fire”, *ottu-kuḍu* “to join”, *kaḍi-vadu* “to be cut off”, *talir-biḍu* “to put forth shoots”, *sokku-iri* “to grow porud”, *bage-dar* “to take to heart”, *more-y-idu* “to cry loud”

(Xi-d)N(nom.)-V~N(acc.)-V

alk-ali “to abandon fear”

(Xi-e)N(now.)-V~(v.p.)-V

kaḍi-ver “to be cut”, *panṇ-āgu* “to become ripe”, *bage-gundu* “to get disappointed”, *be-gaḍu-hattu* “to become amazed”, *bēsar-āgu* “to grow weary”

上の諸例から、前項において、名詞、動詞、形容詞(また幾つの場合、副詞)の間に平行性

が見られること、換言すれば、それらは、互いに平行的性質を維持しながら、前項として機能し、複合語の意味を成就しているといえる。もう一つの重要な現象は、古層カンナダ語において、幾つかのクラスの複合語が、統語的に相応する句と構造的に極めて平行的であるということである。

(Gen.-N)

kolan-a taḍi “a bank of a tank”, *nettar-a kaḍal* “sea of blood”

(Acc.-V)

nīraṃ-negaṇu “to shed water”, *bāyaṃ-biḍu* “to open the mouth”

(relative construction)

katt-ida totṭinlan “the cradle”, *paḍu-va tumbi* “the singing black bee”

(adj.-N)

asi-y-a-naḍu “slender waist”, *kari-y-a-mugil* “black cloud”

(v.p.-V)

nāndu-naneda “that which became wet”, *tūḍu-birutu* “being driven away and feared”

(inf.-V)

tar-al pōgu “to go to bring”, *bar-al vēl* “to tell to come”

2. ドラヴィダ語において、各形式の文法的範疇を決定することは決して容易な作業ではない。既に、1856年、Caldwell は、その『比較文法』において、少なからぬドラヴィダ語の語根が、動詞、名詞、形容詞として用いられる可能性があることを述べた。また、Sambasiva Rao(1973)は、この事象に関連して、ドラヴィダ語に於て、幾つかの接辞が名詞・動詞双方の派生に用いられることを指摘した¹¹⁾。 *Dravidian Etymological Dictionary* (1984)の記載項目を例にとれば、当該延べ語彙数896のうち、タミル語で558、マラヤーラム語で233、カンナダ語語で366、テルグ語で193、少数言語のクイ語で245の形式が、名詞・動詞の間で同形態となっている。また、カンナダ語に関し、*Kannada nighaṇṭu*(1970-)においては少なくとも540項目が、クイ語に関し、Winfield(1929)では440形式で両者間で同形態である。

ドラヴィダ語における形容詞の扱いは、従来、最も議論の多い問題である [Zvelebil 1977: 63]。問題は、独立した文法的範疇として形容詞が存在するか否かという本質に係わるものであり、上に見たように他の語彙項目が機能的に形容詞として振舞うこと、形容

詞としての機能を専らとする語彙項目(語根形容詞,先に挙げた語幹複合によるもの)の数が著しく制限されているということが,この問題に関係している。古代タミル語では,語根形容詞が殆どであり,形成接辞-*a*を伴う形容詞の一般化は後代においてである[Zvelebil 1977: 63]。古層カンナダ語では,先に見たように,両者が既に共存の状況にある。例えば,*asi-y-uḍi* “small pouch” : *asi-y-a-nūl* “slender thread”, *ini-mātu* “sweet word” : *ini-y-a kavite* “sweet poetry”, *pale-gabba* “ancient poetry” : *pale-y-a enṇe* “old oil”

これとの関連で云えば,ドラヴィダ語においては,名詞,動詞,形容詞が語彙的連続体を成しているといえる。しかし,通言語的には,この現象は決して特異なものではない。例えば,近年,Givón(1984)はこの現象を記述するに際し,“time-stability scale”なる概念¹³⁾を導入している。

3. 次に,任意に実際の項目を取り上げることによって,それらが前項に於て如何なる文法的範疇として機能しているかをみてみよう。次のリストは,一つの項目が文法的に多面的な機能をもっていることを示すのに充分であろう¹⁴⁾。

(i) *alar*

N(gen.)-N. *alar-ambu* “who has arrow of flower, Kama” ; V(pres.)-N. *alar-valli* “a flowering creeper” ; N(acc.)-V. *alar-vidi* “to seize flower”

(ii) *iḍu*

V(inf.)-N. *iḍu-gal* “a stone used for throwing” ; V(pres.)-N. *iḍu-gāṇa* “a fishing hook” ; V(passiv.)-N. *iḍu-giccu* “fire made on a hearth” ; N-N(co.) *iḍu-toḍu* “ornaments and clothes”

(iii) *ubbu*

V(pf.)-N. *ubbu-galla* “a cheek puffed out” ; V(pres.)-N. *ubbu-gavaḷa* “a lotus that creates elation” ; N(nom.)-V. *ubbu-gundu* “elation to fade” ; A-N. *ubbu-gobbu* “excessive pride” ; N-N(co.) *ubbu-taggu* “hill and dale”

(iv) *uri*

V(pres.)-N. *uri-gaṇ* “a flaming eye” ; V(passiv.)-N. *uri-y-enṇe* “heated oil” ; V(v.p.)-V. *uri-gedar* “to spread about” ; N(nom.)-V. *uri-vari* “blaze to run” ; N(acc.)-V. *uri-goḷ* “to catch fire” ; N(dat.)-V. *uri-vogu* “to enter flames”

(v) *uḷ*

N(acc.)-V. *uḷ-ḷ-añjisu* “to frighten the mind” ; N(loc.)-V. *uḷ-ḷ-alar* “to blossom in the

inner part” ; A-N. *uḷ-ḷ-ōḷa* “inner blaze”

(Vi) *oḍḍu*

N (acc.)-V. *oḍḍu-gol* “to form a heap” ; N (loc.)-V. *oḍḍu-mere* “to be displayed in masses” ; V (passiv.)-N. *oḍḍu-valage* “a shield” ; V (adj.)-N. *oḍḍ-ōḷaga* “a great assembly”

(vii) *oppu*

N-Adv. *opp-ante* “in a suitable manner” ; V (v.p.)-V. *oppu-gol* “to accept” ; V (passiv.)-N. *oppu-vajjara* “a polished diamond” ; Adv-V. *opp-ese* “to appear to great advantage”

(viii) *kattu*

V (passiv.)-N *katt-anna* “boiled rice tied up for a journey” ; A-N. *kattu-hāvu* “a fierce species of cobra” ; V (inf.)-N. *kattu-kamba* “a post to which animals are tied” ; N (acc.)-V. *kattu-kade* “to go beyond the common boundary” ; N (nom.)-V. *kattu-paḍu* “to be bound”

(ix) *kadi*

N-N (co.). *kadi-kaṇḍa* “cuts and pieces” ; Adv-V. *kadi-gey* “to act rashly” ; V (passiv.)-N. *kadi-vāga* “portions cut off”

(x) *kandu*

A-N. *kandu-belli* “blackish silver”, N-N (co.) . *kandu-kasaru* “dejections and ill humours”

(xi) *kaval*

A-N. *kaval-ambu* “a kind of arrow” ; V (v.p.)-V. *kaval-iri* “to become forked” ; N-neg. *kaval-illada* “who is without parts” ; N (loc.)-N. *kaval-ottu* “the stem of a tree up to the branches”

(xii) *kulir*

V (v.p.)-V. *kulir-kōḍu* “to become very cool” ; A-N. *kulir-gal* “the moon-stone” ; N (loc.)-V. *kulir-verasu* “to be united with coldness” ; N (gen.)-N *kulir-veṭṭu* “the snow-mountain”

(xiii) *koṅku*

V (v.p.)-V. *koṅk-ān* “to get bent” ; N-N (co.) . *koṅku-koṛate* “wrong and defects”, Adv-V. *koṅku-māḍu* “to act in a perverse manner” ; N (nom.)-V. *koṅku-verasu* “alternations to be attached”

(XIV) *cali*A-N. *cali-gadira* “the cool-rayed, the moon” ; N (gen.)-N. *cali-vettu* “the snow mountain”(XV) *tani*V (pf.)-N. *tani-gandha* “a full fragrance” ; Adv-V. *tani-gedar* “to be greatly scattered” ; N (acc.)-V. *tani-y-ere* “to throw delicious food to snakes to appease them”(XVI) *tappu*A-N. *tapp-adi* “a false step” ; N (dat.)-N. *tappu-kānike* “a gift to make amends for a impropriety” ; N (nom.)-V. *tappu-hōru* “a fault to be charged upon” ; N (acc.)-V. *tappu-sādhisu* “to charge a fault upon”(XVII) *talir*A-N. *talir-adi* “an elegant foot” ; N-N (dat.) *talir-ambu* “a young shoot used as an arrow” ; N (acc.)-V. *talir-idi* “to shoot” ; N (nom.)-V. *talir-durugu* “young leaves to abound”(XVIII) *nare*N (nom.)-V. *nare-dōr* “grey hair to appear” ; A-N. *nare-dale* “a grey head”(XIX) *nade*N (acc.)-V. *nade-gal* “to learn to walk nicely” ; N (loc.)-V. *nade-gidu* “to become unable to walk” ; N-N (reit.) *nade-nade* “every step” ; N-N (co.) *nade-nudi* “conduct and speech” ; V (pres.)-N. *nade-vena* “a walking corpse”(XX) *nudi*V (inf.)-N. *nudi-gal* “to learn to speak” ; N (loc.)-A. *nudi-jāna* “talkative” ; N (ins.)-N. *nudi-meccu* “assent by word”(XXI) *nerē*N (acc.)-V. *nerē-koḷ* “to seize the whole substance” ; Adv-V. *nerē-gaccu* “to bite excessively” ; A-N. *nerē-vere* “the full moon”(XXII) *bage*N (nom.)-V. *bage-gidu* “thought to fail” ; Adv-V. *bage-nō* “to get mentally afflicted” ; V (v.p.)-V. *bage-vaḍu* “to think” ; N (gen.)-N. *bage-vane* “the abode of thought, mind”(XXIII) *bigi*V (v.p.)-V. *bigi-y-āgu* “to become tight” ; N (acc.)-V. *bigi-mādu* “to enjoy” ; Adv-V.

bigi-piḍi “to hold firm”

(XIV) *maruḷ*

V (v.p.)-V. *maruḷ-āgu* “to grow bewildered”; V (adj.)-N. *maruḷ-āta* “foolish behaviour”

(XXV) *māru*

V (pres.)-N. *māru-appa* “a merchant”; A-N. *māru-āne* “another elephant”; N (acc.)-V. *māru-gol* “to quarrel about”; V (v.p.)-V. *māru-oddu* “to become opposite”

(XXVI) *mundu*

Adv-V. *mund-aydu* “to go on”; N (acc.)-V. *mund-ari* “to know what is to come”; A-N. *mundu-gade* “the front side”; N (nom.)-V. *mundu-gedu* “prospects to be ruined”

(XXVII) *sari*

V (v.p.)-V. *sari-gaṭṭu* “to make equal”; Adv-V. *sari-gādu* “to fight in an equal manner”; A-N. *sari-pālu* “an equal portion”; N-N (co.). *sari-migilu* “equality and surpassingness”

(XXVIII) *savi*

N (gen.)-N. *savi-gaḍal* “the sea of ambrosia”; N (Nom.)-V. *savi-veccu* “sweetness to increase”; N (acc.)-V. *savi-gāṇ* “to taste”; V (adj.)-N. *savi-gale* “sweet art”; Adv-V. *savi-dōr* “to appear to be sweet”

(XXIX) *suttu*

V (v.p.)-V. *sutt-ari* “to run around”; V (pres.)-N. *sutt-um-gaḍal* “the ocean which surrounds”; V (passiv.)-N. *sutt-ōle* “a coiled *ōle*”, N-N (co.). *suttu-muttalū* “all round”

(XXX) *sokku*

V (pres.)-N. *sokk-aḍike* “a stupefying areca nut”; V (v.p.)-V. *sokk-iri* “to grow proud”; N (gen.)-N. *sokku-nīr* “the juice of rut”; N (acc.)-V. *sokku-mādu* “to manifest pride”

V. 結論

1 上記の素描から、複合語の前項においては、その要素の文法的範疇を一義的に決定することができないことは明確である。それらは、後項により規定される統語的環境によって決定される。

ここで、Zvelebil (1977: 48) に従い、前項を支配する文法的範疇として、品詞体系において語彙項目より上位のクラス、即ち、‘NAV hyperclass’ を導入することにより、記述を

簡潔にすることができる。

2 動詞・名詞・形容詞の複合語前項における意味的・統語的平行性に加え、'NAV hyperclass' 導入の根拠となる、統語形態的・形態的平行性は、以下の2つの事象からも窺える。

統語形態的平行性は、先ず、ドラヴィダ語の一大特徴である pronominalized noun (cum pronominalized adjective) に関わる。これは、名詞あるいは形容詞語幹に人称接辞を直接、付加することによって形成されるが、通常の動詞句と相似した形態素配列を為す。この範疇が最も整然とした形で保持されている古代タミル語の例を見てみよう。

nān aṭi-y-ēn 'I slave -1.p.sg' (i.e. 'I am a slave')
 nān nal-l-ēn 'I good -1.p.sg' (i.e. 'I am good')
 nān pō -v-ēn 'I go -1.p.sg' (i.e. 'I shall go')

[Zvelebil 1977 : 48]

形態的平行性は、ドラヴィダ語において全般的に属格表示接辞・関係詞形成接辞・形容詞形成接辞が同一の形態(南部ドラヴィダ語では *-a* が一般的)をとる傾向があるという現象である。

これらの形態素の来源について、Zvelebil は、古代タミル語の属格表示接辞 *-a* と結び付ける可能性については保留しているが、関係詞形成接辞と形容詞形成接辞は同一の来源であるとする [Zvelebil 1977 : 69.n.29]。しかし、他の箇所で (p.64)、形容詞形成接辞は、pronominalized noun 3 人称・中性・複数の人称接辞より来源したものと述べている。Andronov も同様の見解を採っている [Andronov 1927 : 5]。ところが、彼らの見解が正当化される為には、当該接辞が *-i* となることが一般的な、クイ語、クヴィ語、オッラリ語、ベンゴ語やコンダ語などの中部ドラヴィダ語においても、pronominalized noun 3 人称・中性・複数の人称接辞が *-i* の形式をとっていたことを示さねばならない。

	属格表示接辞	関係詞形成接辞	形容詞形成接辞
Tamil	-atu/-a/-utai	-a	-a
Malayalam	-utai/-utaiya	-a	-a
Iruḷa	-(t)tu/-(t)tu	-a	-a/-āna
Kota	-d	-a	-a
Toda	-n/-t	-a	-a
Kodagu	-ḍa/-ra	-a	-a

Kannada	-a	-a	-a
Tulu	-da/-ta/-na	-i	-a/-e/-i
Telugu	-a(<i>du</i>), -i	-a	-a/-ayna/-āti
Gondi	-na/-ta/-vā/-nā	-a/-ā	-a
Konda	-a/-ti/-di/-i	-a	-ti/-ni
Pengo	-i	-ti/-nt	-i/-ni
Kui	-ti/-ni	-i	-i
Kuvi	-i	-i	-ti/-ni
Kolami	-e/-ne	-a	-a/-ta/-e/-ne
Ollari	-in/-n	-ondi	-ondi
Naiki	-ne/-n/-te	-na	-ta/-n/-t/-ek
Malto	-ki	-o/-e	-u/-po/-pe
Kurukh	-gahi/-ghi/-ghē	-nā	-ntā/-ā
Brahui	-nā/-tā	-un/-kun	-ok

本稿で示してきたような、動詞・名詞・形容詞の間の平行現象が整合性をもつものとして認められたならば、この問題に対し、別の説明を与えることができよう。即ち、この種の-aは、当該の複合語と相応する句構造を有機的に関係付ける形態素として記述することができる。

- 1) ドラヴィダ語族南部ドラヴィダ語派に、タミル語(Tamil)、マラーヤラム語(Malayalam)などともに分類される言語。最古資料は、西紀450年のハルミディ (Halmidi) 碑文、最古文献は、西紀9世紀の Nṛpatuṅga による詩論 *Kavirājamārga* である。
- 2) この区別は厳密にされねばならない。何故なら、複合語は語構成の結果であり、句は統語的操作によって生成されるからである [Anderson 1985 : 40]。
- 3) III-1-(iii)を参照。
- 4) これら2つの形成の派生過程については、Zvelebil(1977 : 63)を参照。
- 5) Anderson(1985 : 42)を見よ。
- 6) 各々の辞書における形容詞の扱いについては、Učida(1990)の appendix を参照。
- 7) インド諸言語のエコーワード構造の全般的記述は D'souza(1987 : Ch.4)を参照。
- 8) このタイプの複合語では、前項は-able 形容詞でパラフレーズできる。
- 9) この複合語では、前項は助動詞としての機能を保持している。
- 10) 古層カンナダ語では、infinitive は purposative として機能する。

11) Ch.3を参照。

12) Andronov (1972), Madtha (1976), Nadkarni (1971), Schiffman (1979) 及び Zvelebil (1977 : Ch.2)を参照。

13) このスケールによれば、名詞は最も時間に関し、安定した現象として辞書に記載される現象であり、一方、動詞は時間に関し、名詞ほど安定しない経験、主として、一時的な状態、イベントや行為をコードしたもので、形容詞は中間的な位置を占める。

NOUNS..... ADJECTIVES.....VERBS

most time stable intermediate states rapid change

[Givón 1984 : 55]

14) この稿、一部 Caldwell(1956 : 195)に負う。

参考文献

Ananthanarayana, H.S.

1984 Influence of Sanskrit on Kannada Compound Formation, *International Journal of Dravidian Linguistics*, Vol. VIII-2, pp.197-208.

Anderson, S.R.

1985 Typological distinction in word formation In.T.Shopen (ed.) *Language typology and syntactic description*, Vol. III. (Grammatical categories and the Lexicon), Cambridge, Cambridge U.P. pp.3-55.

Andronov, M.S.

1972 Notes on the Nature and Origin of the Adjective in Tamil, *International Journal of Dravidian Linguistics*, Vol I -2, pp.1-9.

Annamalai, E.

1982 Dynamics of Verbal Extension in Tamil, *International Journal of Dravidian Linguistics*, Vol. VI-1, pp.22-267.

Burrow, T. & M.B.Emeneau

1985² *Dravidian Etymological Dictionary*, O.U.P.

Caldwell, R.

1956 *A Comparative Grammar of the Dravidian or South Indian Family of Languages*, Madras, University of Madras.

Chao, Y.R.

- 1968 *A Grammar of Spoken Chinese*, Berkeley, University of California Press.
- D'souza, J.
1987 *South Asia as a sociolinguistic area*, Doctoral dissertation, University of Illinois at Urbana-Champaign.
- Givón, T.
1984 *Syntax: A Functional-Typological Introduction*, Volume I, Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins Publishing Company.
- Israel, M.
1973 *The Treatment of Morphology in Tolkappiyam*, Madurai, Madurai Kamaraj University.
- Kittel, F.
1982 *A Grammar of the Kannada Language*, Repr., New Delhi, Asian Educational Services.
- Krishnamurti, B.
1961 *Telugu Verbal Bases*, Berkeley, University of California Press.
- Kulli, J.S.
1976 *Keśirāja's Śabdamañidarpaṇa*, Dharwar, Karnatak University.
- Kushalappa Gowda, K.
1986 *Kannada bhāṣe mattu vyākaranagāla ondu adhyayana*, Mysore, University of Mysore.
- Madtha, W.
1976 Adjective in Kannada, Hiremath, R.C. & J.S. Kulli (eds.) *Proceedings of the Third All India Conference of Dravidian Linguists*, Dharwar, Karnatak University, pp.146-158.
- Meenakshisundaran, T.P. (ed.)
1979 *Tolkappiyam Collatikāram*. Annamalainagar, Annamalai University.
- Nadkarni, M.V.
1971 The Nature of Adjectives in Kannada, *Indian Linguistics*, 32, pp.179-193.
- Narasimhācār, D.L. et al (eds.)
1970~ *Kannada Sahitya Pariṣattina Kannada Nighaṇṭu*. Bangalore, Kannada Sahitya Pariṣattu.
- Rajapurohit, B.B.
1975 Compound Verbal Constructions in Kannada, In. Reddy, G.N. & P.Somasekharan Nair. (eds.) *Proceedings of the Second All India Conference of Dravidian Linguists*, Trivandrum, Dravidian Linguistics Association of India, pp.96-101.
- Ramachandra Rao, B.
1972 *A Descriptive Grammar of Pampa Bharata*, Mysore, University of Mysore.
- Ramaswami Aiyar, L.V.

- 1973 Dravidic Sandhi, *The Quarterly Journal of Mythic Society*, Vol. X X VIII.
- Ravindran, P.N.
1975 *Nominal Composition in Malayalam*, Annamalainagar, Annamalai University.
- Sambasiva Rao, G.
1973 *A Comparative Study of Dravidian Noun Derivatives*, Doctoral dissertation, Cornell University.
- Schiffman, H.
1979 *A Reference Grammar of Spoken Kannada*, U.S. Department of Health, Education, and Welfare Office of Education, International Branch.
- Shanker Kedilaya, A. (ed.)
1973 *Śabdamanidarpaṇa by Kēśirāja* (with commentary of Liṅganārādhya), Madras, University of Madras.
- Shanmugam, S.V.
1971 *Dravidian Nouns-A Comparative Study*, Annamalainagar, Annamalai University.
- Subbarao, K.V.
1979 Secondary Verbs in Telugu, *International Journal of Dravidian Linguistics*, Vol. VIII -2. pp.268-276.
- Suryanarayana, B.J.
1966 *A Study of Telugu Compound with special reference to the Mahabharata of Tikkana*, Tirupati, Shri Venkateshwara University.
- Učida, N.
1990 Adjectives in Modern Kannada (m.s.)
- Vijayavenugopal, G.
1975 *Nominal Composition in Tamil*, Doctoral dissertation, Madurai Kamaraj University.
- Winfield, W.W.
1928 *A Grammar of the Kui Language*, (Bibliotheca Indica, Work no.245) Calcutta, Asiatic Society of Bengal.
- Winfield, W.W.
1929 *A Vocabulary of the Kui Language*, (Bibliotheca Indica, Work No.252) Calcutta, Asiatic Society of Bengal.
- Zvelebil, K.
1977 *A Sketch of Comparative Dravidian Morphology-part one*, The Hague, Mouton.